

インド、昨年10月以来待望の利下げを実施 政策金利を0.25%引き下げ、7年ぶりの低水準に

情報提供資料 2017年8月3日

インド準備銀行(RBI、中央銀行)は8月2日、政策金利(レポ金利)を0.25%引き下げ、6%にすると発表しました。6%は2010年10月以来の低水準となります。インドの金融政策と今後の見通しについて、ご説明します。

▶ 物価が安定、政策金利を6.00%に引き下げ

- 8月1日、2日の2日間にわたる定例の金融政策決定会合で、RBIは政策金利であるレポ金利を6.25%から6%に引き下げることを決定しました。政策金利の引き下げは昨年10月以来で、2015年1月に始まった今回の利下げサイクルにおいては7回目となります。
- 今回の利下げは、7月12日に発表された6月の消費者物価指数(CPI)上昇率が+1.54%(前年同月比)と現行の集計開始以来最低の水準を記録し、インフレが落ち着いた状況となっている中で決定されました。昨年11月の旧高額紙幣廃止の影響で2017年1-3月期の実質国内総生産(GDP)は+6.1%(前年同期比、以下同)と前期の+7.0%から伸び率が低下しています。4-6月期についても7月から施行された物品・サービス税(GST)導入前の在庫調整などの影響で勢いを欠いたものになることが見込まれていることから、景気支援のための利下げ期待が高まっていました。

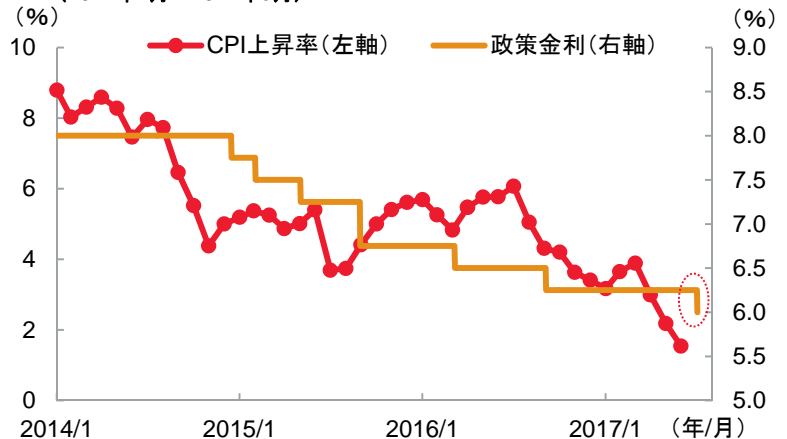
▶ 市場は利下げを織り込み済

- 利下げは市場で織り込まれていたものと考えられ、金融市場の反応は限定的なものとなりました。8月2日の株式市場では、SENSEX指数が前日比-0.3%と小幅ながら下落しました。また、同日の債券市場では、10年国債利回りが0.02%上昇(価格は下落)しました。
- また、為替市場では利下げによる景気刺激期待からルピーが上昇し、対米ドルでは今年の最高値を更新しました。

▶ 追加利下げの可能性

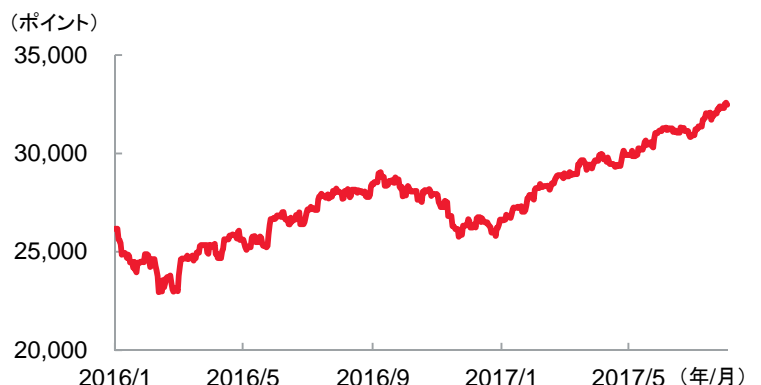
- 利下げの背景としては、食料と燃料を除いたインフレの低下に加え、夏季の降雨量やGST導入に伴う悪影響が見られないことなどが挙げられました。一方で、物価上昇リスクが払拭されたわけではなく、農民の債務免除や国家公務員の給与の引き上げなどによる影響については注視しているとし、RBIは中立の政策スタンスを維持しました。
- 今回の利下げは、景気の下支えとして株式市場や債券市場にプラスに作用すると考えます。インフレ率は今後も比較的 low水準で推移する見込みであることから、当社では2017年度末(2018年3月)までに0.25~0.5%の追加利下げが行われる可能性があると考えています。

政策金利と消費者物価指数(CPI)上昇率(前年同月比)の推移
(2014年1月~2017年8月)



出所: Bloomberg L.P. のデータに基づきイーストスプリング・インベストメンツ作成。CPI 上昇率は2017年6月分まで(2014年12月までは旧基準(2010年=100)、2015年1月以降は新基準(2012年=100))による統計。現在のインド準備銀行のCPI上昇率の中期的な目標水準は、4%±2%。

インドSENSEX指数の推移 (2016年1月1日~2017年8月2日)



出所: Bloomberg L.P. のデータに基づきイーストスプリング・インベストメンツ作成。

インド10年国債利回りの推移 (2016年1月1日~2017年8月2日)



出所: Bloomberg L.P. のデータに基づきイーストスプリング・インベストメンツ作成。

英国ブルーデンシャル社はイーストスプリング・インベストメンツ株式会社の最終親会社です。最終親会社およびそのグループ会社は主に米国で事業を展開しているブルーデンシャル・ファイナンシャル社とは関係がありません。
※当資料はイーストスプリング・インベストメンツ株式会社が情報提供を目的として作成したものであり、特定の金融商品等の勧誘・販売を目的とするものではありません。また、金融商品取引法に基づく開示資料でもありません。※当資料は信頼できると判断された情報等をもとに作成していますが、必ずしも正確性、完全性を保証するものではありません。※当資料には、現在の見解および予想に基づく将来の見通しが含まれることがありますが、事前の通知なくこれらを変更したり修正したりすることがあります。また、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。※当資料で使用しているグラフ、パフォーマンス等は参考データをご提供する目的で作成したものです。数値等の内容は過去の実績や将来の予測を示したものであり、将来を保証するものではありません。